



JASTJ 30周年を迎えて

室山 哲也

1994年7月1日、JASTJは誕生しました。オウム真理教による松本サリン事件が発生した直後で、私は、「クローズアップ現代」のプロデューサーとして、この不可思議な事件を追っていました。あれから30年。時の流れは早いものです。会員の皆様も、この30年の歴史の長さを実感されているのではないのでしょうか。

さて、JASTJの会報第一号には、設立の趣旨として「孤立しがちな、新聞、放送、出版などの企業に属する科学ジャーナリストに、組織を超えた交流の枠組みを作る」「世界各国の同じ分野で活躍するジャーナリストとのつながりをもっと密接なものにする」(岸田純之助会長)とあります。複雑化する社会の中で、新しい科学ジャーナリズムを生み出そうという、先輩たちの気概を感じます。

この30年の間にJASTJは、様々な事件や出来事に向き合いました。大きな変化のひとつに、ネットメディアの出現で、新聞、出版、テレビなど、いわゆる既存マスコミの存在感が低下し、メディアの敷居が下がってきたことがあげられます。

近年、インターネット上では、新聞やテレビで流されるのと同じ情報が駆け巡り、生成AI(人工知能)を使えば、自動的に情報を作り出せるまでになっています。その結果、ジャーナリズムの世界も、大きく変質しはじめています。

この動きの中で、JASTJは、今後の社会に、どのように向き合えばいいのでしょうか? 私は、JASTJ設立時の精神が、再び重要な時代になっているのではと思います。

AIについて取材を進める中、生成AIと人間の言葉の

違いを説明する「接地記号問題」という考え方に出会いました。私たちの言葉は、身体(リアル)に接地して育つ。例えば、ヘレン・ケラーが「水」という言葉を学ぶ時、手に注がれる水の冷たさや、飲んだ時の、あの充足感とともに、記号としての「水」を学び、そこを起点として、言葉の体系が、豊かに育つのだというのです。

これに対して、生成AIの言葉は、身体を持たないため、リアルと接触しない、空中でぐるぐる回り増殖していく「記号のメリーゴーランド」だと説明されています。このことは、私たちに、取材の重要性を示しています。

私たちは、自ら現場に出向いて、一次情報に触れ、その実感や質感を伝えます。その後、情報は二次、三次と加工されていきますが、その情報が、どこからどのように生み出されたものが重要です。「取材は足で稼げ」といいますが、情報を情報たらしめている原点を忘れてはいけないのではないのでしょうか。

今、ネット上では、生成AIによるフェイク情報やフェイク画像が急増しています。今後は、「情報」の真偽を見極める目や、情報の由来を確認することが、ますます重要になっていくと思われます。そしてそれは、私たち人間が納得できる「リアル」な感覚に根差したものでなければなりません。

激変する社会の中でも、私たちは、新しいテクノロジーを積極的に取り入れつつも、コミュニケーションの原点を忘れず、進んでいきたいものです。そして物事を中心に、いつも人間がいることを忘れない、温かい組織であり続けることが大切だと、最近よく思います。

(JASTJ会長)

CONTENTS

巻頭言	1
総会報告	2
ニュース	
科学ジャーナリスト賞2024 受賞者決定	4
科学ジャーナリスト賞2024 講評	5
特集 JASTJ設立30周年	
30年の歩みから読みとりたい「人と時代」	8
記念パーティー開催、記念誌編集者募集など	9

例会報告(2月) ノーベル賞級の高純度単結晶	10
例会報告(2月) プロの技をAIで誰でも利用	11
例会報告(3月) ゲームチェンジが起きている宇宙開発	12
例会報告(4月) AIと心の問題	13
オピニオン/賛助会員・団体	14
理事会から/賛助会員・団体	15
事務局だより/新入会員/会員のBOOKS	16